

第56回（平成23年度）公開研究会 外国語科（英語）発表要項

「発信力」を高める英語学習指導の在り方

－4技能を統合的・総合的に育成する年間指導計画の編成を通して－

田村 岳充 星野 百合子 高久 由紀子

平成20年3月に告示された中学校学習指導要領を受け、同9月に刊行された解説には、今回の指導要領改訂の経緯として冒頭に次のような記述がある。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識もと盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。（下線は筆者による）

コミュニケーションの手段としての外国語、特に英語の重要性が高まっていることを示している。また、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査などの各種の調査結果について以下のように言及されている。

思考力・判断力・表現力などを問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題（下線は筆者による）

こうした背景を受け、本校共同研究では、「新しい時代に対応した授業の在り方を考える－活用型学習活動の実践を通して－」を研究テーマとして3年間の研究を進めてきた。それを受け、外国語科では、「『発信力』を高める英語学習指導の在り方－4技能相互の活用を中心として－」をテーマに設定した。この研究テーマをもとに、4技能を統合的・総合的に育成するため、4技能相互の関連を意識し、既習の知識・技能を活用させ、発信力を高める学習活動の在り方について研究を進めてきた。研究の成果は、本校の第55回公開研究発表会発表要項に示しているが、教師の観察やワークシートの評価例などから生徒の発信力並びにそれを支える思考力・判断力の伸長が観察されている。

一方で、平成24年度から新学習指導要領にもとづいた教育課程が全面実施となることを受け、外国語科の改訂の趣旨、先行実施される小学校外国語活動との接続や本校外国語科のこれまでの研究の成果を踏まえながら、新しい指導計画を編成することが急務となっている。

1 研究テーマ設定の趣旨

1 英語教育に関する提言から

平成19年8月に出された、中央教育審議会教育課程部会外国語専門部会「外国語科の現状と課題、改善の方向性（検討素案）」には、次のような記述がある。

社会や経済のグローバル化の急速な進展に伴い、単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成がより重要となっている。このため、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識などについて、自らの体験や考えなどと結びつけながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、中学校・高等学校を通じて、4技能を総合的に育成する指導を充実する方向で改善を図る。
(下線は筆者による)

この素案から、中学校で現行の指導要領のもとで「聞くこと」「話すこと」に重点を置いて育成されているコミュニケーション能力に、「読むこと」や「書くこと」を加え、4技能を総合的に育成することの必要性が述べられている。

2 本校の共同研究から

本校では、平成 20 年度からの 3 年間、共同研究テーマとして「新しい時代に対応した授業の在り方を考えるー活用型学習活動の実践を通してー」を設定し、研究を進めてきた。学習指導要領の改訂に伴い、これまでの授業の在り方について再考し、知識・技能を「生きてはたらく知識・技能」へと高める学習活動の在り方について追究してきた。

平成 23 年度からは、「確かな学びを通して自己を確立する生徒の育成」をテーマに研究を進めることとなった。本論冒頭でも述べたような社会的な背景の中で、知識や技能を獲得することはもとより、それらを実社会でも活用できるような思考力・判断力・表現力などを育成することが求められている。本校教育目標や生徒の実態を受け、共同研究において設定した本研究テーマで掲げる生徒の姿を外国語科（英語）としても強く意識し、具体的な姿として以下のようにとらえながら研究を進めていく。

○自己と周囲との調和を図ることのできる、自己肯定感の高い生徒

自分の意見・考えをしっかりと持ち、コミュニケーションを図る中で、互いに意向を伝え合い、受容し合い、理解し合うことができる。その過程で自分の存在が認められることを実感することで、自己肯定感を高めることができる。

○よりよい集団・社会を築こうと、自ら考え判断し、行動(実践)出来る生徒

コミュニケーションを図る中で、話し手や聞き手（書き手や読み手）として取るべき態度を自覚し、必要な言動を適切に選択し、表現できる。

3 外国語科（英語）のこれまでの研究から

本校の外国語科（英語）では、これまでの研究において、生徒に言語の使用場面や働きを意識させ、自己表現を促す活動を数多く設定し、「英語で表現できた」「英語で表現できてよかった」というコミュニケーションの楽しさを実感させることに努めてきた。また、生徒に身に付けさせたい実践的コミュニケーション能力（以下「実践的」を省略）を、次のように定義してきた。

コミュニケーション能力

- ア 「自分の考えや気持ち」を言語の使用場面と働きを意識して表現する能力
- イ 「相手の考えや意向」を受容し、対話する意味を創出できる能力
- ウ 基礎・基本を自分なりに活用し、コミュニケーションを図ろうとする態度

この定義を受け、平成 17～19 年度の 3 年間ににおいては、イに焦点化し、生徒同士の相互交流を指向した研究を行い、研究の成果として、いわゆる「聞き手」の側である生徒の技能が向上させることができた。

※52 回公開研究会外国語科（英語）各論参照

しかしながら、「話し手」の側である生徒の発話内容を分析すると、適切な語彙や文法事項が使用できない状況が見られた。

続く平成 20～22 年度の 3 年間の研究では、「聞き手」の育成を続けつつ、既習の知識や技能を活用しながら、「話し手」の技能を向上させることを目指すことにした。「話し手」に身につけさせたい力を「発信力」と呼ぶこととし、以下のように定義した。

発信力

コミュニケーションを通して得た情報や知識をもとにして、自らの意見や考えを相手に分かりやすく伝達することができる力

4 技能を相互に関連させ、既習の知識や技能を活用させる学習活動を充実させることで、生徒の「発信力」を向上させることができた。

※55 回公開研究会外国語科（英語）各論参照

上記のようなコミュニケーション能力や発信力を身に付けた生徒の姿は、2 で述べた共同研究で目指す生徒像と重なる部分が多い。従来から実践してきた授業展開の中で大切にしてきた話し手・聞き手（書き手・読み手）の指導を継続しつつ、互いの意見・考えを受容し合い、互いの存在を認め合うことや、振り返りをもとに自分の成長を確認することを通して自己肯定感が高められるようにしたい。

以上の 1～3 の 3 点から、本校外国語科（英語）では、平成 24 年度からの新学習指導要領の完全実施に備え、これまでの研究の成果を盛り込み、新たに設定された共同研究のテーマを意識しながら、4 技能を統合的・総合的に育成し、3 年間を通してより効果的に「発信力」を高めることのできる年間指導計画を編成することを目指すことにした。その結果、研究テーマを「『発信力』を高める英語学習指導の在り方 ― 4 技能を統合的・総合的に育成する年間指導計画の編成を通して―」と設定することにした。

2 研究計画

上記の趣旨をふまえ、以下のような研究計画を設定した。（年度は研究年度を示す）

1 第 1 年次（平成 23 年度）

- (1) これまでの研究の成果と課題並びに新指導要領の重点項目の確認
- (2) 外国語科（英語）の年間指導計画編成の基本方針の検討
- (3) 3 年間を見通した発信力育成のための方策の検討
- (4) 研究の視点にもとづいた授業デザイン・実践・振り返りと事例の集積

2 第2年次（平成24年度）

- (1) 外国語科（英語）の年間指導計画編成の基本方針の修正
- (2) 年間指導計画の編成と単元の指導計画・評価計画の作成
- (3) 研究の視点にもとづいた授業デザイン・実践・振り返りと事例の集積
- (4) 研究の評価方法についての検討

3 第3年次（平成25年度）

- (1) 年間指導計画にもとづいた授業デザイン・実践・振り返りと指導計画・評価計画の修正
- (2) 研究のまとめ及び評価
- (3) 新研究の内容の検討

3 研究内容

1 これまでの研究成果の確認

本校第55回公開研究会外国語科（英語）各論で示したように、教師の観察やワークシートの評価例などから生徒の発信力並びにそれを支える思考力・判断力の伸長が観察されている。これは、研究の推進に合わせて行ってきた授業改善の成果であり、その要因を挙げると、以下ようになる。

- ア 各学年の授業を改善し、基礎・基本の習得に関する指導にさらに重点を置くとともに、それらを活用させる場面や方法などを工夫すること
- イ コミュニケーション活動の導入部分を見直し、生徒の知的好奇心が刺激されるような魅力あるトピック選びに工夫を重ねたこと
- ウ ペアや小グループでの対話活動や英作文を行う際には、伝えたいメッセージのポイントが受け手に伝わるように、誤りを必要以上に気にしすぎることなく活動が進められるように留意したこと
- エ アイコンタクトのような表面的な注意事項のみならず、教師も積極的に自己開示を行うなどユーモアを大切に、互いを受容的に受け入れ合える雰囲気作りを心がけたこと
- オ 聞いたり読んだりしたことをもとに、自分の意見や考えについて話したり、書いたりする活動を継続的に行うようにしたこと
- カ 自分の意見や考えを表現させる際には、誰に、何の目的で伝えるのか、状況設定をするよう努めたこと

本校外国語科（英語）で定義した「発信力」を育成することを目指し、生徒が自らの意見や考えを適切に表現できるようにするため、まずは教科書の内容理解の際に音読を一層大切にしたり、コミュニケーション活動を行う際に活動の難易度を徐々に上げたスモールステップを充実させ、語彙や文構造を着実に身につけさせたりすることができるような習得型の学習活動を充実させた。

次に、既習の知識・技能を活用し、語彙や文構造を使いながら体得していく活用型の

学習活動について検討・実践し、その充実を図ってきた。自分の意見や考えを発信する際に、誰に向かって、何の目的で話したり、書いたりするのかをしっかりと意識させたが、対人意識が強まると、メッセージのポイントが適切に伝わるように、どんな語彙や文構造を使うか、発話の調子や声量はどうか、などを適切に行う意識も同時に高まるからである。また、ここで言う活用型学習にはどのようなものがあるか改めて整理すると、以下の3つに分類をすることができる。

(1) 発信力育成のための具体的な方策及び外国語科（英語）における活用型学習活動

ア 4 技能が相互に活用された活動

生徒が、英語学習の大きな目的として「自分の考えや気持ちを発信すること」を意識させ、「聞くこと」・「読むこと」による受信内容に、自分の考えや気持ちを合わせて、「話すこと」・「書くこと」を通じて、他者に伝える（発信する）ことができるような活動

イ 既習の複数の文構造を用いる活動

生徒が、自己表現の場面において、現在学習している新たな文構造だけではなく、その場に応じた表現を自ら選択し、既習の知識・技能を複合的に使用できるような活動

ウ 語彙・文法の使用・習得が反復的に図られる活動

生徒が、「自分の意見や考え」を伝え合うために必要な、語彙や文構造を確実に習得するために、既習事項を反復して使えるような活動

これら3つの活用型学習を効果的に授業に位置づけ、生徒の発信力を育成してきた。

(2) 「発信力が身についた生徒の理想像」及び「発信力育成のための学年目標」の検討

発信力を3年間通して育成していくために「生徒の実態」及び「発信力の定義」から、本研究における「発信力が身に付いた生徒」の理想像を次のように設定した。

- ア 自分の意見や考えを、相手に分かりやすく伝達できる。
- イ 既習事項の中から、その場に応じた適切な表現を選択できる。
- ウ まとまった分量の英文を論理的に構成することができる。
- エ 自分と聞き手との関係や相手の理解度に応じた表現の工夫をすることができる。

さらに、「中学校指導要領（平成20年9月）外国語編」に記述されている、生徒の学習段階を考慮した各学年の指導配慮事項を参考に、各学年の発信力育成の学年目標を次のように設定した。この評価もと準をもとに、発信力の見取りを行い、研究成果の検証をしてきた。

学年	第1学年	第2学年	第3学年
関心 意欲	コミュニケーションを通して得た知識や情報をもとにして、自らの意見や考えを相手に分かりやすく伝達しようとする。		
ア	簡単な表現を用いて、自分の気持ちや身の回りの出来事などについて伝達することができる。	つなぎ言葉を用いたり、具体的例を示したりしながら、自分に関わる事実関係や物事について判断した内容などを伝達することができる。	場面に応じた適切な表現を用いて、様々な意見や考えに対しての自分の意見や考えなどを、伝達することができる。
イ	既習の語彙や文法事項の中から、その場にふさわしいものを使って、自分の考えや気持ち、事実などを伝えることができる。		
ウ	文字や符号を識別して正しい英文を書くことができる。	語と語のつながりなどに注意して、自分の考えや気持ちやその理由などを読み手に伝わるように書くことができる。	文と文とのつながりなどに注意して、自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くことができる。
エ	自分と聞き手の関係や、相手の理解度を確認したりしながら自分の意見や考えを伝達することができる。		

※ 学年間の境界線は厳密に定めず、弾力的に運用することとする。

2 新学習指導要領の重点項目

平成 20 年 9 月に刊行された学習指導要領外国語編の改訂のポイントに注目して、そこに挙げられている内容を整理し、本校外国語科（英語）の年間指導計画の編成に留意すべき点として活用することにした。

(1) 評価の観点の改訂

現行の指導要領で示されている外国語科（英語）の評価の 4 観点のうち、新指導要領では 2 観点が改訂されている。

現行	新
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	同左
表現の能力	外国語表現の能力
理解の能力	外国語理解の能力
言語や文化についての知識・理解	同左

（下線は筆者による）

本校ではこれまでも、生徒が自分の意見や考えを発信する際には英語を使って行うことを基本としてきた。また、生徒に与えられるインプットも、英語を通して行われるようになってきた。今回の指導要領の改定で評価の 2 観点の名称が改訂され、「外国語」という言葉が追加されたことで、生徒のアウトプット、教師（ALT、時に級友）や英文によるインプットが英語で行われることを基本とすることが改めて確認されたことになる。

また、これまで技能の一つとして独立して考えられていた表現の能力を、生徒が「思考し、判断した結果をもとに、事実や自分の意見・考えを表現できる」力として改めて定義し直している。このことから、単に定型的なフレーズを使って話したり、書いたりするのではなく、自分の意見や考えを加えた自己表現としての表現の能力の育成が求められていることが分かる。

(2)内容 言語活動の改訂

新指導要領では、先に触れた中央教育審議会外国語専門部会での議論を受け、現行の学習指導要領下での課題をもとに、コミュニケーション能力のもと礎を一層養うことを目指し、話すこと、聞くこと、読むこと、書くことの4領域の言語活動の指導事項について改訂をしている。4領域に新規に加えられた項目を挙げると以下ようになる。

	新規に加えられた項目
聞くこと	<u>(オ) まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。</u>
話すこと	<u>(オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。</u>
読むこと	<u>(ウ) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり、賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。</u>
書くこと	<u>(イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。</u> <u>(ウ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。</u>

(下線は新規に加えられた文言・筆者による)

本校外国語科（英語）では、これまでも上記のような内容について、4技能を統合的に育成しながら、発信力を高める指導を行ってきたが、上記の項目を改めて意識しながら、3年間の指導計画を再度見直し、より効果的なものとすることにした。

(3)評価の基本方針

1 (2)で挙げた発信力育成のための学年目標及び、2 (1)，新指導要領の評価の観点の改訂、さらに2 (2)，言語活動の改訂で示した内容を受け、本校外国語科（英語）では、生徒の評価について以下のような基本方針をもとに行うこととした。

- ア 語彙や文構造は繰り返して指導し、十分活用させて初めて習熟、定着につながることから、総括的な評価は、単元・学期末のパフォーマンステスト及び実力テストなどの機会に行う。

イ 1時間ごとの授業では、教師の指導が生徒にどの程度理解されているか、形成的な評価を行い、次時以降の指導に生かす指導と評価の一体化のサイクルを基本とする。

ウ 総括的な評価を行う際には、評価の観点と評価方法などを生徒に事前にガイダンスし、ねらいを理解させうえて、学習状況を自己評価させたり、相互評価をさせたりする機会を設定し、十分学習できる時間を与える。

エ 単元末、学期末の評価場面においては、個々の生徒のそれまでの学習の成果を発揮させ、設定された規準をもとに評価を行う。

上術のアからエの基本方針を反映した評価計画の例を示すと、以下ようになる。

年間	1 学期	単元① 配当 7	授業①	教師の指導，生徒による十分な練習・活用
			授業②	生徒の理解度の把握と，次時の指導へ還元
			授業⑦	総括的な評価（評価・評定に生かす評価）
		単元② 配当 6	授業①	教師の指導，生徒による十分な練習・活用
			授業②	生徒の理解度の把握と，次時の指導へ還元
			授業⑥	総括的な評価（評価・評定に生かす評価）
	2 学期	単元⑤ ...	授業①	教師の指導，生徒による十分な練習・活用
			授業②	生徒の理解度の把握と，次時の指導へ還元
	3 学期	単元⑩	授業⑧	総括的な評価（評価・評定に生かす評価）

これまで、本校においても、年間指導計画・単元の指導計画に合わせ、1 単位時間ごとに詳細に評価項目・場面を設定してきた。しかし、実際にこうした評価計画を運用すると、教師の注意の多くが、指導ではなく過度に評価に注がれることにもつながりかねない。先に示した評価の基本方針のもと、教師は、毎時間の授業で、教科書の内容理解や語彙指導、コミュニケーション活動を通した文構造の指導などに専念し、生徒の学習状況をつぶさにモニタリングする。指導と評価の一体化を目指し、モニタリングの結果を次時以降の授業に還元することを目指すためである。評定に生かす総括的な評価は、指導事項を生徒が十分に学んだ後で、単元末や学期末の評価場面で、あらかじめ設定した規準にもとづいて評価を行うのである。

3 小学校外国語活動との関連

小学校における外国語活動は、中学校に先立ち平成 23 年 4 月から実施されている。本校のある宇都宮市においては、既に全ての公立小学校で、総合的な学習の時間での取り組みも含めて先行実施されている。本校生の多くが卒業する隣接の附属小学校でも、3 年前から外国語活動を行ってきている。

小学校外国語活動で育成すべき素地についてはこれまで多くの議論がなされているが、小学校外国語活動のねらいを踏まえ、附属小学校で外国語活動を担当している教師と実際に意見を交換し、より具体的な話し合いを進めている。附属小学校においては、今年度より「慣れ親しんだ英語で、人とのかかわることを楽しむ子どもの育成 ―インプットから意欲を高め、自己表出に生かしていく活動の展開―」という研究テーマを設定し、英語に触れる必然性を高めるため、楽しさを味わうストーリー性のある展開を工夫し、自然な流れの中で英語によるインプットを豊かにした授業を展開している。先生や友人の話す英語を聞いてみよう、聞いた英語の内容を理解しようとする意欲を高め、無理することなく自然に自分の意見や考えを相手に伝えようとする児童を育成しようとしている。

本校外国語科（英語）においても、英語による Introduction, Interaction を始めとする自然なインプットを質・量ともに充実させる指導を展開してきており、小学生が慣れ親しんでいる活動を知ること、年間指導計画に何を取り入れるか、特に中学校 1 年生の導入期の指導について具体的な検討ができる段階まで来ている。主に聞くことを通して、慣

れ親しんできた英語がどのような場面で使われ、どんな機能を持っているのか、また、どんな綴りで表わされ、どのような構造で句や文となっているのか、など小学校で体験した内容を中学校の学習内容とつなげることができるようにしていきたい。中学校では、学習内容の理解や定着が評価されることになるため、何を目標として学んでいくのか、ガイダンスをしっかりと行い、生徒が目標に向かって学べるようしっかりと導いていきたい。そして、これまで慣れ親しんできたことが明確になり、分かる、できる喜びを感じさせることができるようにしていきたいと考えている。

宇都宮大学教育学部英語教育担当教授の指導のもと、小中学校相互の授業をビデオ記録して分析を行うなど、小中の接続についての研究も進めている。

年間指導計画の検討に合わせ、今後も附属小学校外国語活動部と連携を深め、相互の授業参観やミーティングを継続して行っていくことにしている。

4 新指導要領に対応した年間指導計画の編成

上記1から3までの内容を踏まえながら、生徒の年間指導計画を編成するに当たり、以下のような基本方針を考えた。

ア 語彙・文法の使用・習得が反復的に図られる活動を設定すること

○3年間を見通した帯学習

基礎・基本の習得に関する指導にさらに重点を置くとともに、それらを活用させる場面や方法などを確認すること

イ 既習の複数の文構造を用いる活動を設定すること

○ペアや小グループによるコミュニケーション活動

新出文構造の習得、既習の知識・技能の活用を図るため、ペアでのダイアログをベースとしたコミュニケーション活動を行うこと

○まとまった量をアウトプットさせる自己表現活動

学期ごとに与えられるテーマをもとに、スピーチや英作文など、まとまった量の自己表現活動を設定し、既習の複数の文構造を活用させる機会を設定すること

ウ 4技能が相互に活用された活動を設定すること

○4技能を統合的に活用させた活動

読むこと・聞くことから、話すこと・書くことを関連させた活動を設定し、4技能を統合的に育成する活動を設定すること

帯学習とは、1単位時間の中で完結するのではなく、毎時間、授業時間の一部を使って反復的に行われる学習を指す。本校外国語科（英語）では、授業の冒頭、導入部分の短い時間を帯学習に充て、基礎・基本の習得・定着を促進させたり、既習の知識・技能を活用させたりする機会としている。その過程で、小学校との接続を考えた学習内容を検討したり、学年、学期間の連続性を意識したりするなど、3年間を通して効果が上がるような計画を立てている。

(1) 語彙・文法の使用・習得が反復的に図られる活動

～ 3 年間を見通した帯学習の設定～

上記の方針アにもとづき、3 年間の見通しを持った帯活動を設定することにした。

	1 学期	2 学期	3 学期
1 年	音と文字をつなげる → 指導	ペアでの Small Talk (相互質問)	
2 年	Small Talk → (相互質問)	Small Talk(テーマ固定) サイドリーダー (多読)	
3 年	Small Talk(テーマ固定) サイドリーダー (多読+質疑応答)	Small Talk (フリー) Journal Writing (帯学習外で活用)	

(1 年生の事例)

ア 期待できる効果

1 年生では「簡単な表現を用いて、自分の気持ちや身の回りの出来事などを、伝達することができる」ようになることを第一に考えて授業作りに臨んできた。入門期には、小学校外国語活動で慣れ親しんでくる英語の音声について、それらを文字と組み合わせながら体系的に理解をさせるため、フォニックスを意識しながらアルファベットや単語の指導を行う。そして、生徒の学習が進み習得語句や文構造が増えるのにもなって、それらを用いたコミュニケーション活動の機会を多く取り入れるように考えた。コミュニケーション活動を進めるにあたって大切なことの一つに場面設定を挙げることができる。そこで、学習した文構造を反復して使うことができるような工夫として、帯学習を授業の始めに位置づけた。その一つの例として取り組んだ活動が Small Talk である。これを行うことによって、生徒は既習の文構造を何度も使うことになり、それらの理解が深まり、習得につながると考えられる。さらに、この繰り返しが自己表現につながり、発信力育成のための土台となることが期待できる。発信力を育成するための土台として、伝えたいことがある、伝えるべき相手がいる、ということは大切である。そのため、どんなトピックについて話をするのか、その選定には工夫を凝らした。

平成 17 年度から行った研究の中でも、聞き手を育成することを主眼として実践を行っているが、聞き手側に受容的な姿勢が見られる、相手の伝えたいポイントを的確にとらえ、それに応じて会話を継続していくことが大切であることが分かっている。本実践は、その基礎となるものとして実践しているものである。

指導過程としては、1 学期の途中から、英文 1 文でお互いに質問し合うことから始め、徐々にリアクションや発話量を増やして自然な会話につながるように試みた。下に①から⑤として、活動の流れを示す。(下の A と B は、dialog を行う二人とし、また、右は、その際の目指す生徒の姿とする。)

イ 実践事例

上で紹介した Small Talk の実際を以下に示す。左に指導過程として、生徒のやりとりの流れを、右にその中で育成することを目指す生徒の姿を示した。

プロセス

① Step 1

A : 1 Question

B : 1 Answer

② Step 2

A : 1 Question

B : 1 Answer

A : リアクション

③ Step 3

A : 1 Question

B : 1 Answer + one

④ Step 4 【3Q・Time】

A : 1 Question

B : 1 Answer + one

⑤ Step 5

インタビューテスト

(与えられたトピックで会話する)

目指す生徒の姿

A は身の回りの物や事について尋ねることができる。そして B は、それに対して正しく答えることができる。

A は、B の返事に対して「相づち」など適当なリアクションをとりながら聞くことができる。(※リアクションは、この時期からコミュニケーションの一要素として大切にしてい)

B は A の質問にただ答えるだけでなく、新たな情報を加えて返事をする(「プラス・ワン」とする)ことができる。

A は、3つの質問をし、B は、それぞれの質問に対してプラス・ワンしながら答えることができる。(以後 3Q・Time「サンキュー・タイム」とする)

(この際、A も B もお互いにリアクションをしながら相手の話を聞き、流れのある会話になるようにすることを目標とした)

ペアで 3Q・Time によるインタビューテストを行う。(自己評価をすることで自分なりの課題を見つけ、さらに今後の学習意欲につながるようにした)

(インタビューテストを終えた生徒の感想)

- ・ 英語で人と会話すると難しいけど、うまくできると嬉しいことが分かりました。
- ・ What food do you like?の語順が曖昧になっていたのを、確実に言える&書けるように練習していきたいです。
- ・ 声を大きく出すことやすごく苦手なリアクションを頑張りました。
- ・ How many～s・・・?のところで名詞を入れるのを忘れてしまい言い直したこともあったので、文の形をしっかりと覚えることが英会話の上達のコツだと思った。
- ・ 途中日本語が出てしまったので、授業中は完全に「英語だけで話す」ことを意識したいです。

今回のインタビューテストは、その場でペアにトピックを与えた。(sport /music/ TV program /movie から一つ) そのため、興味の有無やその度合いは生徒によって異なり、トピックによっては質問したり答えたりするのが難しいと感じる生徒もいた。学年が進み表現力が高まってくるとともに、自分が話したいトピックを考えさせるなど、自由度を増していくことも考えている。また、単発な質問ならできるが、相手の返事に応じて次の質問を考えるなど、つながりを考慮しながら会話を発展させることは、まだまだ難しいと感じている生徒も多く、今後の課題である。しかし、相手の言うことに相づちを打ちながら聞くなど、互いの考え・意見を受容し合っている姿が多く見られた。また、リアクションへの意識が大きくなったことは、帯学習としての **Small Talk** の成果と言えるだろう。振り返りのコメントからも、活動の中でよかったところを改めて感じて自己肯定感を高めたり、今後に向けての課題を明確にさせたりしている様子が伺える。

(リアクションの効果)

リアクションは、相手の言ったことを確認し、正しく聞き取ったり、対話が円滑に継続されたりするために重要な要素だと考えている。相手の言ったことに対して、下のような **reaction→repeat→response** を繰り返しながら聞くことで、話す側はより話しやすく感じ、また、聞く側は話の内容をより理解しながら聞き取ることができるのではないだろうか。

Reaction (反応) Wow! Great! Really? Uh,hum? Oh,yeah?

Repeat (繰り返し) Oh, you are ~ . Oh, you play ~ .

Response (応答) I see. Me, too. など

(2) 既習の複数の文構造を用いる活動

既習の複数の文構造を用いる活動 ～ My Speech ～

前述の方針イにもとづいて、各学年、学期ごとにまとまった量の自己表現をさせる活動を設定することにした。3年間の英語学習を終える時点で、小学校外国語活動も含め、学んできた知識・技能を総動員して取り組む活動を設定する。

自分の意見や考えをどのくらいの質と量で表現すればよいのか、ゴールを設定し、それを事前に生徒に提示することで、現在学んでいることがらが、今後何のために生かされるのか、いつまでに発信力をどの程度身につけていけばよいのか、見通しを持って学ぶことができるようになる。このことは、学習意欲を高めるためにも重要である。本校外国語科(英語)では、このように3年間の最終段階のゴールを設定し、そこに向かってアウトプット活動を各学期・学年に位置付けていくことにした。このような計画のスタイルを、バックワードデザインと呼び、様々な場面で授業・単元の設計や評価のために活用することになっている。以下に、各学期に、既習の複数の文構造を活用しながら、自分の意見や考えを表現したり、友人の発表から学んだりする活動の一覧を示す。

	1 学期	2 学期	3 学期
1 年	自己紹介をしよう (speech)	My favorite thing (Show&Tell)	My Speech フリーテーマ
2 年	春休みの思い出	My Town Project (Show&Tell)	My Speech フリーテーマ
3 年	修学旅行の思い出	行事を終えて (Show&Tell)	My Speech フリーテーマ

ア 期待できる効果

生徒たちにとって、日頃学習していることがその後何に活用できるのか、という問いは、切実な問題である。そもそも、そのことがらをなぜ学んでいるのか、という問いに対して我々教師が明確な回答を準備できなければ、生徒たちの自立的な学習を促進させることは難しいものとなる。そこで、年度当初に上記のような学習の見通しを示し、教科書の学習内容やコミュニケーション活動などで身に付けた知識や技能が、学期末や年度末に位置付けられているアウトプット活動に向けて不可欠であることをガイダンスすることにした。また、これらのアウトプット活動を設定する際に、生徒たちの生活と関連があるトピックを選んだり、自分の意見や考えを伝えるべき相手の存在がある状況を作り出したりするなど、表現したいという生徒の思いを高めるための工夫をすることにした。その際、どの文構造を用いるか、ということを経営させるのではなく、トピックや場面設定を優先させることとし、複数の言語材料が自然に活用されるようにした。このような工夫により、生徒が学習の必要性や必然性を感じることができれば、既習の複数の文構造を用いて、自分の意見や考えを表現しようとする意欲を高めることができると考えた。

活動の当初にはモデルとなる過去の英作文の作品やスピーチから学ぶ時間を、そして、途中には、ペアやグループで互いの英文の内容や表現の工夫を学び合う機会を設定した。先輩や友人の作品のよさを学ぶとともに、これから目指すべきゴールや、自分の思考の流れや英作文について見直す機会とするためである。自己の学習状況の認知をさせることは、自律的な学習者を育成するためには不可欠なものであると考えている。発表の終了後には、自分が何を学んだか、そして、今後どうすべきかを具体的に記述させる振り返りの時間を設けた。これも、自己の学習状況を認知させるためには大切であると考えている。

イ 実践事例

ここでは、2年生の最後に設定された My Speech について紹介する。この活動が充実したものとなるよう、年度当初から意図的に学習を進めてきた。聞き手を惹きつけるスピーチをするには、聞き手の関心を惹いたり、納得を引き出したりするため、理解しやすい、内容が整理された原稿を書いていく必要がある。そこで、以下のようなステップで学習を展開することにした。まず1学期には、まとまった分量の英作文をするための工夫について学ぶこととした。2学期には、自分の思いや感情を聞き手に伝えるため、英語らしい音声表現を磨くために、リーディング教材を小グループで群読する活動を行った。生徒たちはグループ内で協力し、教科書の英文の行間を読み深め、登場人物の心情に迫って、

その感情をどう表現するかを考えながら群読した。

3学期に位置付けられる My Speech では、次の3つのトピックの中から、生徒に好きなものを1つ選ばせ、スピーチを作成させるようにした。自分で好きなものを選ぶ、という過程で、自己責任の意識が生まれるからである。

- ① My Memories

今年1年を振り返って
- ② My Hopes

来年（高校・大学・将来を含めて）の自分の夢について
- ③ Message to ～

自分の気持ちを伝えたい相手に向かって

また、アイデアマップ作りや、段落の構成が見えるよう枝分かれ図を作成させることにした。こうした、1学期に行った英作文を行う際のプロセスを使いながら、自分の思いやこだわりをいかに伝えるか、生徒が視覚的なイメージをしやすくなる工夫を行った。

自分の思いも英語で語ろう！ My Speech

Class / No. / Name

★スピーチテーマを考えよう

次の中から自分に合うものを1つ選んでスピーチの内容を検討していこう。

12年生の1年を振り返って

My Memories

4年に向けて

My Hopes

自分の気持ちを相手に伝えるメッセージ

Message to ～

★スピーチの内容を考えよう

自分で思い描く内容（文ではなく）でマッピングしていこう。

★考えを整理しよう

★Comment from:

テーマに関して、やりたいことや夢など、たくさん書かれていて良いと思います。

活動中には、ペアや小グループでの学び合いが行われるようにし、アイデアマップづくりでは、友人のアイデアから自分自身の発想を豊かにするためのヒントを得たり、枝分かれ図につなぎ言葉を記入させたりして、英文の構成を視覚的にとらえ、論理的な文章の展開を意識できるようにした。例えば、感謝の気持ちを友人に伝えようとトピックの3番目の Message to～を選んだ生徒の中には、普段何気なく一緒に生活をしている友人が、いかに自分を支えている存在であるのか、改めて気付くことができ、その思いが意欲を高め、感謝の思いでいっぱい英作文を完成させることができた。

(活動を終えた生徒の感想)

・ 緊張していてあまり発音を気にかけられなかった。また、練習のときよりも紙を見る回数が多くなってしまった。でも、みんなが静かに聞いてくれる安心感があった、つかえずにスムーズにできたと思います。スピーチは相手に話しかけたら、伝えたりするものだから、もう少し感情も込められたら、と思った。発音も意識しないと直らないと思うのでがんばりたいです。

- ・ 1つのスピーチにこれだけの力を注げてよかった。今まで知らなかった単語や発音などを新たに学べてよかった。これからは、文と文とをつなぐ接続詞の使い方を意識したい。1つ1つの単語の音に気をつけたい。人の話を最後まで聴きたい。
(下線は筆者による)

生徒の振り返りからは、スピーチの作成から発表を経て、発信力の伸長に向けた自分の成長を感じているだけでなく、話し手として聞き手に届く効果的なスピーチの仕方について具体的な気づきを書かれたり、聞き手と一体となって学び合うことの大切さが述べられたりと、発信力だけでなく、共同研究で目指す生徒像へとつながっていくコメントが見られた。

(3) 4技能が相互に活用された活動

サイドリーダー（英字新聞）を利用した活動 ～reading から speaking へ～

4技能を統合的に育成することは、今回の指導要領の改訂の重点になっているが、本校ではこれまでも継続的に取り組んできている活動である。これまでの研究・実践の成果を踏まえ、読むこと・聞くことから、話すこと・書くことを関連させた活動をさらに推進していくことにしている。

この活動は大変高度な活動となるが、3年間を通して計画的・継続的に活動を積み上げていくこととともに、基礎・基本の習得など、(1)・(2)で取り上げてきたような活動の成果があいまって実現可能となる。どのような指導過程を経ているか、紙幅の関係で紹介できないが、本論で紹介する事例とともに過去の各論を参照していただきたい。

ア 期待できる効果

普段の授業での英作文や Journal writing の活動を通して、生徒は Speaking の表現の幅を少しずつ広げてきた。内容については、身近な場面における出来事や体験したことなどを中心に行ってきた。（例：興味のあるスポーツ、音楽、本、修学旅行や学校行事の体験など）生徒はそれぞれの体験についてグループで感想を伝え合ったり、簡単な質問をし合ったりする活動も行ってきた。ここで、話題に国内外のタイムリーなニュースを取り入れることにより、さらに興味を持って対話活動に取り組めるのではないかと考え、英字新聞活動を取り入れた。英字新聞を取り入れることにより、主に次の効果が期待できると考える。

(7) 4領域をバランスよく取り入れることができる

新聞記事を単に個人レベルで読むだけではなく、グループで記事を読む、感想・意見を伝える、相手の感想・意見を聞く、そしてその内容を書いてまとめる、というプロセスを経ることで、4領域をバランス良く取り入れた表現活動を行うことができる。

(4) 国内外のタイムリーな話題を取り入れることで表現内容の幅が広がる

英字新聞は、国内外のタイムリーな話題が満載である。スポーツから芸能、そ

して国内外の時事問題や環境問題、最新の映画の話題まで幅広い記事を読むことができる生徒は、与えられた記事ではなく、その中から、自分たちの興味・関心に合った記事を選び表現活動を行う。既習の語彙や文法を活用しながら、最新の情報について感想や意見を述べ合うことにより、自分とは異なった考えや表現を知る良い機会となる。

イ 実践事例

生徒に英字新聞¹ (Catch a Wave) を配布し、まずは個人レベルで記事を選び読むよう促す。前述したように、記事の内容には様々なジャンルがあるので、それぞれが興味・関心に合わせた記事を選んでいく。その後、4人グループになり、グループとして話題にあげる記事の一つに絞る。記事を選んだら、その記事を内容ごとに四等分し、大まかな内容を把握する。内容については、未習の単語や表現も多く含まれるため、新聞の巻末についている辞書を利用して日本語でまとめることとする。4人で全体の内容を把握したところで、簡単な表現を使ってお互いに感想や意見を述べ合う。その際、相手が話した内容について簡単な質問をしたり、リアクションをとったりするように促した。最後に、対話活動の内容を踏まえた上で、記事についての感想・意見を書いてまとめる。以下はそのプロセスを示したグループ活動の一例である。

(一人の生徒のみ抜粋)

Let's read English articles!
3-(4) 節(34) News

1 グループで1つの記事を選び、図解しよう。
注意事項!
あくまでも「図解」すること。すべての文を和訳する必要はありません。

選んだ記事のタイトル「RACE TO DEVELOP NEXT-GENERATION ECO-FRIENDLY CARS」
図解文

今後エコカーに人気が高まると自動車会社は予想し、様々な技術、良いデザインを開発したエコカーを開発している。
これらは、トヨタ、
三菱、
ホンダのFCX クラリティとエコカーは水素を走る。これにはかなり抵抗と少なく設計されている。
リイオー、ダイカワは民間企業と協力しエコカーと叫ぶ。この車は馬車並の速なエコカーを開発している。
(B) in 2006/4

2 記事を読んでグループの中で図解や意見を伝え合おう。
fantastic!

3 グループのメンバーの図解や意見を互いに伝えつつ、自分の記事内容を英語でまとめよう。

I've thought eco-friendly cars are not good but that may be wrong because many car manufactures have developed very useful cars. So it says, cars that now seem like science fiction fantasies may become popular on the streets in the near future. I hope to get a driver's license to ride them some day.
--

①記事の内容をおおまかに把握することができた。 A B C D
②記事についてメンバーに図解を伝えることができた。 A B C D

記事の内容については、興味があるものであると同時に、新しい発見もあるので非常に興味を持って行っていた。各活動をグループのメンバーと助け合いながら行うことにより、英語が比較的得意な生徒が、苦手な生徒を手助けする場面も見受けられた。

生徒からは、
「みんなで協力して出来たので、どう話せばいいかわかるようになった。」

「相手の意見を聞く機会があったので、一つのことでもいろいろな意見があることが分かった。」

「相手がいることで、自分の意見を上手く伝えられるよう工夫できた。」などの感想が寄せられた。

¹ 浜島書店が発行する英字新聞

また、内容についても、「最新のニュースや映画、あまり知らなかったニュースがたくさんあって楽しかった。」「英語で日本のことが書かれていて、国内の状況も知ることができた。」「様々な内容が載っていて、面白い・読みたいと思えるものが多かった。」などの感想があった。

これまで、自分自身に起こる出来事や、家族、そして友人などに関することについては比較的容易に表現できていたが、日常のタイムリーなニュースなどの話題についてはなかなかうまく意見や感想を伝えられない生徒が多かった。ALT との授業の際も、突発的に意見や感想を求められると言いきりやどんでしまうこともあった。しかし、今回のグループでの対話活動を通して、生徒たちは、様々な記事に関する意見や感想を簡単な英語を使って少しずつ表現できるようになってきた。生徒が書いたワークシートを分析すると、他のメンバーの意見を、自分の感想の中に取り入れながら表現している生徒もみられた。これは相手の話をきちんと聞くことを意識して活動を行っているからであろう。このように、中学校3年生では、自分の意見や考えを英語で伝達したり、相手の気持ちを英語で聞いて理解したりするなど高度な活動も要求される。こうした活動が行える土台には、本校外国語科（英語）で目指す「発信力」の育成だけでなく、コミュニケーションを図る中で、互いに意向を伝え合い、受容し合い、理解し合ったり、話し手や聞き手（書き手や読み手）として取るべき態度を自覚し、必要な言動を適切に選択し、表現できたりするような資質を育んできたことが大きい。

今後もコミュニケーションを通して自己表現ができるような話題設定を工夫することを心がけながら対話活動を考えていきたい。

4 成果と課題

1 成果

研究初年度にあたり、各学年を担当する本校外国語科（英語）の3名が共同研究で目指す生徒像や、科として掲げている「発信力」を身に付けた生徒像について話し合い、その具体的なイメージを共有することができた。これまでも意識はされてきたが、その双方が関連付けられたイメージを、各学年、そして3年間の指導の流れの中に当てはめて考えることができ、指導計画のグランドデザインを作成することができた。バックワードデザインで考えられた3年間の指導の流れの中に、「発信力」育成のためのアウトプット活動を位置付け、そこに向かって基本的な知識・技能を繰り返し活用させる帯活動も設定することができた。

2 課題

作成した指導計画が平成24年度から実施されるための諸準備を整えることが急務である。指導計画のグランドデザインをもとに、単元の指導計画や評価計画を作成するだけでなく、ガイダンスや振り返りの方法についても検討を進める必要がある。確かな学びを実現させるため、何のために学ぶのかというねらいを教師と生徒が共有していくことが大切になる。また、学習態度をはじめとする、個々の生徒の基本的な学習姿勢を確立させたり、互いを認め合う学習の雰囲気を高めたりすることも重要である。

アウトプット活動をさせる際には、実際の生徒の姿を記録し、モデルとして次年度に引き継ぐことも必要になってくる。研究初年度に作ったグランドデザインを適宜修正しながら、目指す生徒像を実現するための具体的な手だてを講じていきたい。

【引用・参考文献】

- 文部科学省(2003) 「『英語が使える日本人』育成のための行動計画の編成について」
中央教育審議会外国語専門部会(2007) 「外国語科の現状と課題、改善の方向性」
中央教育審議会外国語専門部会(2007) 「専門部会第17回における主な意見」
中央教育審議会(2008) 「幼稚園、小学校、中学校、高など学校及び特別支援学校の学習指導要領などの改善について(答申)」
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領
宇都宮大学教育学部附属中学校
- (2004) 第49回公開研究会発表要項
(2007) 第52回公開研究会発表要項
(2008) 第53回公開研究会発表要項
(2010) 第55回公開研究会発表要項
- 伊東治巳(1999) 『コミュニケーションのための4技能の指導』 教育出版
大下邦幸編(2001) 『コミュニケーション・クラスの理論と実践』 東京書籍
三浦 孝編(2002) 『だから英語は教育なんだ』 研究社
渡邊時夫編(2003) 『英語が使える日本人の育成 MERRIER Approach のすすめ』 三省堂
- 文部科学省(2005) 「初など中など教育における国際教育推進検討会報告」
三浦 孝(2006) 『ヒューマンな英語授業がしたい!』 研究社
- 文部科学省(2008) 「中学校学習指導要領解説 外国語編」
平田和人編(2008) 『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』 明治図書
伊東治巳(2008) 『アウトプット重視の英語授業』 教育出版
田村岳充(2008) 『聞く・話す・読む・書く 4技能を高める!コミュニケーション・ワーク 37』 明治図書
- 大井恭子編(2008) 『パラグラフ・ライティング指導入門』 大修館書店
太田 洋(2008) 『英語を教える50のポイント』 光村図書
和泉伸一(2009) 『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育』 大修館書店
- 田中武夫(2009) 『英語教師のための発問テクニック—英語授業を活性化するリーディング指導』 大修館書店
大下邦幸編(2009) 『意見・考え重視の英語授業』 高陵社書店
福井大学教育地域学部附属中学校研究会(2009) 『第2巻 授業のプロセスとデザイン 英語編』 エクシート
- 肥沼則明(2011) 指導と評価 2011年4月号『「育てたい生徒像」を目指した指導と評価—中学校英語—』 図書文化社